

## あとがき

大阪大学附属図書館の貴重コレクション「石濱文庫」には、1940年代前半に満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』が世界で唯一、ほぼ完全な形で所蔵されている（全178号、うち5号分欠）。本資料が近代内モンゴル社会の諸相をビビッドに再現しうる極めて豊富な情報を有することは、(1)都馬バイカル准教授（桜美林大学）らによる「フフ・トグ」研究会の活動、とりわけ記事索引（モンゴル語とそのローマ字転写、日本語）の作成作業、(2)中国でのリプリント版刊行計画と、ナランゲレル・内モンゴル大学教授による記事細目（モンゴル語）の作成に示されている。

大阪大学未来研究イニシアティブ・グループ支援事業「21世紀課題群と中国」（提案代表者：田中仁，2013～2015年度）は、大阪大学での「東アジアの知的インフラ構築をめざす中国地域研究の新たな拠点創生」を企図し、東アジア言語空間、21世紀課題群、歴史学の刷新という三つの視点を掲げた。このうち「東アジア言語空間」にかかわる課題について、『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化とデータベース公開という課題として捉えなおすとともに、田中が参与するNIHU現代中国研究（2007～2016年度、東洋文庫拠点・政治史資料研究班）のミッションとの接点に注目し、『フフ・トグ（青旗）』データベースの公開というアジェンダから、東洋学のみならず、モンゴル語をふくむ多言語の情報処理、知的財産権にかかわる法的問題、学術資源の保存と公開の関係、さらには東洋文庫や京都大学人文科学研究所、あるいは内モンゴル大学蒙古学学院などとの内外のネットワーク構築の可能性を展望できると考えた。また基盤研究(C)「東洋学学術資産としての石濱文庫の基礎的研究」（研究代表者：堤一昭，2014～2016年度）は、大阪大学石濱文庫を総合的な東洋学学術資産と位置づけるとともに、『フフ・トグ（青旗）』をその象徴的存在として再定置を掲げた。

2014年12月に研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞“フフ・トグ（青旗）”のデジタル化と公開の可能性」（NIHU現代中国研究・東洋文庫拠点政治史資料研究班主催）を、2015年9月にワークショップ「戦前期モンゴル語新聞“フフ・トグ（青旗）”データベースの構築・公開にむけて」（大阪大学未来研究イニシアティブ「21世紀課題群と中国」、堤科研「東洋学学術資産としての石濱文庫の基礎的研究」主催）を大阪大学で開催、その成果を、田中仁・堤一昭編『戦前期モンゴル語新聞“フフ・トグ（青旗）”のデジタル化と公開の可能性：東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録』（OUFCブックレットvol.7,

2015年), 田中仁・堤一昭編『戦前期モンゴル語新聞“フフ・トグ(青旗)”データベースの構築・公開に向けて』(OUFCブックレットvol.9, 2016年)として公刊した。

2015年9月開催のワークショップは、『フフ・トグ(青旗)』第8～11号(1941年5月)を素材として、記事索引・記事細目および国際情勢記事をもちよりデータベース構築とその公開にむけた諸課題を総合的に討議した。そこで私たちが想定していたのは、写真資料とモンゴル語をふくむ多言語Web検索システムとしての『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築であった。とは言え、その実現にあたってはシステム開発やサーバ設置・保守など経費確保をふくむさらに検討を要する項目があることから、これを将来の課題と位置づけ、さしあたり同紙のウェブ上で公開とその「記事索引」「用語集」「写真集成」の整理・編纂に集約して注力することにした。

大阪大学石濱文庫所蔵『フフ・トグ/青旗』(1941年), ならびにモンゴル語新聞『フフ・トグ/青旗』記事索引(1941年)は、こうした成果をOUFCブックレットvol.10-1/2として刊行するものである。

(田中仁)